
ハルケギニアに滅竜魔導士が召喚されたようですっ！ご都合主義ですが何か？

今田 麻衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアに滅竜魔導士が召喚されたようですっ！ご都合主義ですが何か？

【Nコード】

N9787X

【作者名】

今田 麻衣

【あらすじ】

ハルケギニアに竜の力を持った魔導士が召喚されます！！

オリジナルストーリーを展開して行きます。

ご都合主義でお送りいたします！！

サイトも出ますが空気になる可能性が大いにあると思います…

FT要素は魔法だけです！

ちなみに作者は原作をしりません！アニメとWikiとSSSのみの知識だけで書いて行きます！

ここは魔法都市ジパング。

二つの月がとある広場を照らす夜。

今、ここではとある少年の公開処刑が始まろうとしていた…

「ではこれより罪人リュウ・アマガハラ処刑を開始する！！」

執行人が処刑場に集まった人達に告げる。

観衆からはこの処刑に賛成する者は誰ひとりいない…
この処刑はジパング皇帝の独断により決まった理不尽なる処刑なのだから…

「罪人、リュウ・アマガハラは皇帝陛下の城に乗り込み、皇帝を暗殺しようとした罪により皇帝陛下の名の下に火焙りの刑に処す！」

執行人が罪状を述べ手にした罪書を燃え盛る火の中に投げ入れる。
彼が何故処刑されるのかというと、この少年は力を持ちすぎたのだ…
彼の魔力に恐れた皇帝は自分を脅かす存在になってしまった少年を

「ハハッ…これで終わりか…ワリイな親父…」

少年は笑いながら小さく謝罪した。彼には何か目的があったようだが、手足を拘束され足元から迫り来る炎にはどうすることも出来ない。

少年は迫り来る炎をこの身に受け止めようと目を閉じたその時、少年の頭上に大きな光が広がった。

その光は大きく、辺りの人や建物を眩しく照らしている。

「誰だっ！？訳の解らぬ魔法を使ったのは！」

光で目を潰された皇帝は大きく叫ぶ。だがここに集まった群衆もこの光によって目を潰されてしまっているのでパニックになっていた。

ようやく光が消え、人々に視力が回復した時には、処刑されていた少年の姿は無く、そこにはただ燃え盛る炎があっただけだった…

2 (前書き)

投稿です！

少年が姿を消す少し前、ここはハルケギニア、トリステイン王国のトリステイン魔法学院の広場。今ここでは進級の為の使い魔の召喚の儀式が行われていた。

この召喚の儀に臨んだ生徒は色々な使い魔を召喚し終え、使い魔と交流を深めつつ、最後の一人の召喚が終るのを待っていた。

だが、この一人が中々使い魔を召喚する事が出来ずにただ時間だけが過ぎ去っていた。

彼女の名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

かなりの美貌を持ち、気品溢れるその佇まいや出身の家がかなりの有名所なので、知らない人は誰もいない程である。

しかし、彼女には一つだけ欠点があった。この世界では決してあってはならない欠点だ。

彼女は皆が当たり前に使えている魔法が何一つ使えないのだ…その事でも彼女はこの学院では有名なのだ。

彼女が召喚の儀を始めてからどれくらいの間が経っただろうか？周りには魔法の失敗で出来た穴が無数に出来上がっている。

「ミス・ヴァリエール…今日はここまでにしてまた後日行いましょう。」

「嫌です！コルベール先生もう一度だけお願いします！」

ルイズの折れない意思、強い瞳がコルベールを居抜く。

「分かりました…ではこれで最後にしますよ。もし召喚出来なかったら後日に回します。良いですね？」

「はいっ！ありがとうございます！」

コルベールの言葉にルイズ更なる気合いを入れる。
そしてゆっくりと精神を統一して心から願う。

「宇宙のどこかにいる私の下僕よ！私は心から求め願うわ！強力な使い魔よ…私の導きに答えよ！」

ルイズの心から願った言葉に答えるよう、今まで失敗してきた魔法が嘘のように大きな光を放ち出す。

退屈に見ていたクラスメートもルイズの今までの爆発とは違う魔法の輝きに思わず見入ってしまう。

誰もが初めて成功したと驚きを隠せず、何が出て来るのか見を乗り出し見ていると、これまでとは規模も威力も最大級の爆発が起こり、我先にルイズが召喚した使い魔を見ようと近付いたクラスメートはその爆風に巻き込まれ吹っ飛ばされる事になってしまった。

「やっぱりルイズには魔法は使えないんだって！流石はゼロのルイズだな！」

「このゼロめ！僕の使い魔が逃げてしまったらろっ！」

クラスメートは次々とルイズに罵声を浴びせて行く。

だがルイズにはその罵声は耳に届いてはいなかった。彼女は土埃でまだ見えていない爆心地をジッと眺めていた。

彼女には何かを召喚した手応えがあったからだ。

次第に土埃も晴れていき、爆心地がつつすらと見えるようになっていた。そこには二つの影が見える。

一つは黒髪にこのハルケギニアでは見ないような衣類を見に纏った少年と、手足を縛られ首には何か鍵のような物をつけた茶髪の少年がいたからだ。

「見てみる！ルイズが平民を召喚したぞ！しかも一人は手足を縛られてる。罪人か？」

「ゼロのルイズにはお似合いだな！」

二人の少年を見たクラスメートは更にルイズに罵声を浴びせる。ただコルベールだけは違っていた。この使い魔召喚の儀は一人一体の使い魔が召喚される事になっている。だがルイズはこれまで前例のない二体の使い魔を召喚したのだ。さらに召喚される使い魔は主にこの世界に生息している人ではない生物が出て来る、だがルイズが召喚したものは紛れも無い人間。こちらも前例のない出来事に驚いていた。

「コルベール先生…もう一度サモン・サーヴァントをやらしてください！これは間違いなんです！しかも平民二人だなんて…」

「ミス・ヴァリエール。サモン・サーヴァントは一回だけです。いかなる理由であれ、召喚した使い魔と契約を結んでもらいます。」

コルベールの言葉に肩を落とし、召喚された二人に向き直す。

「感謝しなさい！貴族である私があんた達平民にこんな事するなんて、ぜええええつたい無いんだからねっ！」

そう言って黒髪の少年の顔を両手で挟み、口づけをする。

黒髪の少年は言葉が通じていないのか、訳の解らない顔をしたままルイズの口づけを迎え入れる。

「次はあんたよ！」

そう言っつて茶髪の少年にも同じように口づけをする。茶髪の少年は言葉は通じているが、手足を縛られた状態で身動きが取れない上にいきなり召喚されたものだから頭が付いて行けず、なすがままになっっていた。

ルイズとの強制的な契約の口づけが終わり、黒髪の少年は伝わらない言葉で何かを言おうとしたその時、左手に激しい痛みが襲っつてきてその場でうずくまる。

茶髪の少年も右目付近に激しい痛みが駆け巡る。二人とも声にならない叫び声をあげていた。

「これは使い魔のルーンを刻んでるだけよ。直に痛みは引くわ！」

ルイズの言葉も今の二人には届いていない。

やがて痛みが引く頃には黒髪の少年は痛みを耐え切れずに気を失ってしまったようだが、茶髪の少年はギリギリ気を失わなかったようだ。

「ふむ…二人のルーンは見たことないルーンですね。では皆さん。召喚の儀式も全員できましたので解散します。」

そう言つてコルベールは二人のルーンを素早くスケッチをして生徒に解散するよう言つた。生徒達は空に浮かび、各自寮に戻つて行つた。

残っているのはルイズとコルベール、茶髪の少年と気を失っている黒髪の少年だけになった。

「なあ…頼みがあるんだが手足を縛っているロープを解いてくれないか？」

茶髪の少年がルイズに手足のロープを解くようお願いする。

「はあ？何言つてんのよ！？ご主人様にそんな口の聞き方するわけ？それに手足を縛られてる罪人かもしれない素性も知らないあんたを自由にするわけ無いでしょう！」

「生憎これが俺の話し方なんだ。俺はお前と使い魔の契約をしたんだ。主人であるお前を殺したりするような事はしないさ。それに俺を自由にしないと俺自体が動けないし、そこで伸びてるもう一人の使い魔をどう運ぶつてんだ？」

茶髪の少年はルイズに言う。

「ふんっ！口の聞き方は気に食わないけどある程度自分の身分を理解出来てるようね…仕方ないわ、ちよつと待ってなさい！」

そう言っつてルイズは茶髪の少年の手足の拘束を解き、自由にする。

「ほら、解いたわよ。これで動けるでしょ？早くそいつを担いで付いてきなさい！」

ルイズはそう言っつと、寮に向けて足を進めだした。茶髪の少年は黒髪の少年を担ぎ、ルイズの後を追った。

「全く…何なのコイツは？気持ち良さそうに眠っつて！平民が貴族のベッドで寝るなんてありえないわよ！」

女子寮に到着して、黒髪の少年をベッドに寝かした後、ルイズはそう言っつ出した。

「まあそう言っつな。いきなり呼び出されて何も解らないまま使い魔契約をされたんだこのくらい大目に見てやれよ。あと自己紹介がまだだったな。俺はリュウ・アマガハラっつてんだよろしくな！名前はまだ長いが、これで十分だ。」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。所であんたはやたらと落ち着いてるわね。使い魔召喚や契約の事も知ってるような口ぶりだし。あと何で縛られてたの？それに名前はまだ長いってあんた…ま、まさか貴族じゃないでしょうね？」

互いの自己紹介を終え、ルイズはリュウに疑問をぶつける。リュウの名前はまだ長いという発言に少し顔を青くして質問する。同じ貴族を使い魔召喚しとなればかなりの大問題なのだから。

「名前の事は気にするな。没落した貴族でも何でもないから、俺は召喚される前は帝国の魔法部隊の隊長をしてたんだ。あと俺が何故縛られてたかだったな？それは俺がここに召喚される前は処刑される寸前だったからな。」

リュウの言葉にルイズは啞然とした。罪人かもしれないという可能性はかなりあったがそれ以前に帝国直属の魔法部隊長をしていた人を召喚してしまったという事に…つまり彼はメイジだという事だ。ただ貴族ではないという事だけは良かったかもしれない。

「確かに表沙汰では俺は罪人だが、俺はでっちあげられた罪を突き付けられ問答無用で処刑されそうだったんだ。その時お前が俺を召喚したって訳だ。だからそんなマズイって顔するなよ。俺は直属の皇帝から処刑されかけてたんだし、召喚されて良かったと思ってるから！」

「それなら良いけど…て事はあんたは無実で処刑されそうだったのね…どうして処刑されそうだったのよ？」

「簡単に言えば俺の力が強すぎてそれにビビった皇帝が俺を捕まえて殺そうと思っただけだ。」

リュウは自分の処刑までの話しを簡単話した。軽く話すものだからルイズは嘘か本当かイマイチ信じられない状態だ。

「力が強すぎるって…あんただんだけ凄いやないか？ クラスは何！？ スクウェアなの？」

「スクウェアがどれ位のクラスかは分からないが、国やその周辺国では俺に敵う奴はいなかったな…まだ聞きたい事あるか？」

ルイズはまた驚かされる事になった。クラスはどうあれ、国で最強のメイジという事には変わりはないのだ。ルイズは更に思った。このハルゲキニアで最強と名高い自分の母とどちらが強いのかと…

「まだあるわ。あんたはメイジなんですよ？ だったら何か魔法を使ってみなさいよ！」

「そりゃ無理だ！俺の首を見てみる。何か鍵みたいなのが付いてるだろ？これは俺の魔力を全て封じる特別な魔具でな、これが付いてる限り俺は一切魔法が使えないんだよ。」

そう言っつてリュウは首に付いた鍵を見せる。

「そんな事言っつて本当は魔法が使えないから見栄を張っつてこんな事言っつてるんでしょ？情けないわね！」

ルイズの言葉は魔法が使える嫉妬から来る言葉なのか、本当に強いメイジかもしれないリュウが今は魔法が使えない事に同じ共感する言葉かは分からない。

「まあ封印が解けたら見せてやるよ。最強の風魔法つてやつをさ！」

ルイズの言葉を軽くスルーしたリュウは封印が解けた時はルイズに魔法を見せる約束をした。

ルイズまた驚いた。リュウが本当に魔法が使えるなら、このハルケギニアの中でも最強とされている風のメイジだという事に、更に最強と自負している辺り、よほど自分の魔法に自信があるのか、またはよっぽどの自信過剰なのか…だからこそ母と闘っつてほしいと思う。最強の風メイジは誰なのかを解らせる為に。

「ふんっ！よつぼど自分の魔法に自信があるみたいね！あんたの国じゃ最強だったかもしれないけどこのハルケギニアには本当に最強の風のメイジがいるんだから！」

ルイズは自分の母を思いながらリュウに言う。あんたなんか最強なんかじゃない！この世で最強は私の母なのだからと。

「ん？なあ。お前今ここはハルケギニアって言ったか？」

「えっ？言ったわよ。それがどうかしたの？」

リュウの質問にルイズは不思議に思う。何故彼がハルケギニアを知ってるのかを。明らかにガリア、ロマリア、ゲルマニアの出身ではないような口ぶりだったから。

「いやな、このハルケギニアに俺の姉貴がいるらしいんだ。探しだして親父の事を話したいと思ってたからな。いつかここに来ようと思ってたんだが、まさかこんな形で望みが叶うなんてな！」

リュウは笑いながらルイズに言う。

「あんたは一体何処の出身なのよ？それにハルケギニアはとてつもなく広いのよ！？たった一人を探すのにそれだけしか手掛かりがな

いなんて見つけるのは不可能に近いわ！」

「まあ何とかなるだろ。探し物は案外近くにいるかもしれないしな。」

リュウの言葉にルイズは首を傾げるだけだった。

「あと俺の出身だったな…ハルケギニアを中心に考えるならサハラを越えてはるか彼方にある東方って言えば分かるか？」

「東方ってロバ・アル・カリエのメイジなの？」

「ここでは向こうの事をそう呼んでんのか？向こうは広大な土地だからな。何百の国が在るんだぜ。俺はその中のジパングって国から来たんだ。」

ハルケギニアの人々は東方を一つの呼び名で呼んでいたが、リュウのいた東方は何百という国が在る事にルイズはまた驚かされる事になった。

「向こうとヘルケギニアとの間にサハラってあるでしょ？そこに住んでるエルフはどうなの？向こう側に住んでるエルフも居るのでしょ？やっぱりあんた達もエルフと戦っているの？」

始祖ブリミルの聖地であるサハラ付近に住んでいるエルフについてもルイズはリュウに聞いた。

「何でエルフと戦うんだ？こっちはじゃエルフと物凄く仲が良いぞ？供に共存して生きてるからな。」

前にエルフから聞いた話だが、ハルケギニア側に住んでいるエルフはハルケギニアの人間を酷く憎んでるらしいぞ。こっちは何もしていないのに、いきなり攻めて来るらしいから常に警戒していないといけないとか何とか言ってたぞ。」

ルイズは思った。幼い頃からブリミル様の教えでエルフから聖地を奪還する事をロマリアの教皇達から教えられて来たのだ。だが、東方の人間はエルフとかなりの友好関係を築いているらしいではないか、更にサハラ付近に住んでいるエルフはハルケギニアのメイジと戦う時は決して自分達から攻めていない事も知る事になる。ルイズの頭は今まで教えられてきた事が全て否定されたような感覚に陥ってしまった。

「おい。どうしたんだ？頭抱え込んで？」

「お願い…ちょっと一人にしてちょうだい…」

ルイズの言葉にリュウは了解と言い静かに部屋を出て行った。

彼女が何を思っていたのかはリュウは全く分からないが寮から外に

出て、近くの木に座り込み、この地に住むまだ見ぬ姉の事を想った。

黒髪の少年が目覚めたのはリュウが部屋から出て行って直ぐの事らしい。

2 (後書き)

なんかルイズが丸い気がする…

感想や誤字脱字があれば宜しくお願いします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787x/>

ハルケギニアに滅竜魔導士が召喚されたようですっ！ご都合主義ですが何か？

2011年10月30日22時18分発行